

演劇都市ロンドンに劇場が生まれたころ

—— 講義のための覚え書

佐久間 康 夫

2012年夏、ロンドンでオリンピックが開催されたことはまだ記憶に新しいところだ。ブリテン島に生きる人々の歴史を壮大なスケールで描いた開会式のショーは映画監督のダニー・ボイルの演出になるものだった。“The Isles of Wonder”と名づけられた式典の題名は、シェイクスピアの『テンペスト』のせりふに由来している。ちなみにオリンピック記念にイギリスで発行された5ポンド銀貨の裏面にも、シェイクスピアのグローブ座の浮き彫りに重ねるように、同じ『テンペスト』から“We are such stuff as dreams are made on”という有名な台詞を引用して刻印がなされている。

開会式ではケネス・ブラナーのようなイギリスを代表する名優が登場し、歴史上の人物に扮して、“The Isles of Wonder”というテーマにまつわる台詞を朗読していたのがたいそう印象的だった。見事な演出に目を奪われる一方で、このようなパフォーマンスをイギリス人が得意としていることに、さらにいうなら劇的な直観自体がイギリスの大きな文化的特質であることに、あらためて感じ入った次第である。

イギリスの演劇文化の中心はむろん首都ロンドンであるが、その演劇の都に芸能が芽生えたのは今を去ること数百年の昔である。イギリスの演劇史を扱った研究書や概説書の類は、えてして記述が詳細にすぎ、外国人である日本人の学生や初学者にはやや煩雑な印象を与えることも多かろう。そこでイギリス演劇の流れを、きわめて大づかみに概観することで、そのダイナミックなうねりをまずは把握してみることも有益なのではないかと考え、以下にいわば講義の



黄昏のロンドン。



オリンピックマークが掲げられたタワー・ブリッジ。

ためのノートとして小文をつづってみたいと思う。

イギリス演劇史研究の泰斗リチャード・アクストン博士の著書 *European Drama of the Early Middle Ages* (1974) 以来、定説となった意見にしたがえば、中世のイギリスに発祥した演劇の源流をたどると、二通りのルーツが考えられるという。ひとつはキリスト教の礼拝の一環として、教会堂の内部で上演された典礼劇の流れ。いまひとつは、五月祭や収穫祭などの折に、屋外や大邸宅の広間などで上演された民衆の芸能に連なるものである。

前者はつまり宗教的な内容を盛り込んだ演劇といえるが、クリスマスやイースター（復活祭）といった教会暦に合わせて、聖書に記された内容を劇化して上演された。一方、後者の民俗芸能の範疇に入るものとしては、12～13世紀にかけて単純な劇的要素を含んだ芸能が流行したという記録が残っている。これらは土俗劇、モリス・ダンス、剣舞、仮装劇などとさまざまな呼称でよばれている。このふたつの流れは、それぞれに縁がなかったというわけではなく、むしろ相互に影響を与えあって発展したものと推察されている。そうして後世のイギリスにおける演劇や芸能の世界を、よりいっそう豊穡な芸術へと変貌さ

せていったのである。



今も中世の町並が保存されるコヴェントリーの一区画。

1311年に、コーパス・クリスティ祭（聖体祝日）が制定され、これを機に一気に聖史劇の上演が盛んになる。これは旧約・新約聖書の数々の逸話を集大成した、いわゆるサイクル劇（連作劇）という形式をとる演劇だった。宗教的な儀式という装いのもと、町の人々全員が参加して上演にかかわったのである。チェスター、コ

ヴェントリー、ヨーク、ウェイクフィールド、リンカンなどのイングランドの諸都市に、当時の台本が残っていて、今日にいたるも定期的に市民による上演の試みがなされているほどである。まさに共同体をあげての一大年中行事のひとつであったようだ。

その舞台のありようは、上演された土地によっても異なっているが、移動式の「^{パジェント}山車」が用いられることが多かった。現代英語の用法でも、ある種の劇的な演目のことを“pageant”とよぶ例があるが、その語源になっている。上演時間は、1日で終わる演目から、数日かけて演じられる出し物まで、多様であった。公演日には、初夏のコーパス・クリスティの祭日が当てられ、種々のギルドがそれぞれ自分たちにふさわしい題材の演目——たとえば、釘屋組合は『磔刑』、船大工組合は『ノアの方舟』といった具合に——を採りあげたのである。

15世紀になると、^{モラリティズ}道徳劇とよばれる寓意的な芝居が誕生する。そこでは美德や悪徳といった抽象概念が擬人化されて、登場人物の役名とされ、主人公の罪の救済が主たるモ

チーフとされた。

最初にプロフェッショナルな役者がイギリスに生まれたのは、15世紀の半ばころといわれている。彼らは中世初期に地方回りをしていた芸人たちの末裔といっていだろう。貴族や高僧のお抱えの召使だったという可能性も大いに考えられる。このような職に就いている限り、まず最低限の生活面での保障がなされていたことになるからである。身近なところには、僧侶などの知的階級に属する人々がいて、台本を提供してくれる人材にも事欠かなかった。別な角度から見れば、みずからの芸や芝居を見せたいと思うときには、自分たちの仕えている主人がいつでも常連客になってくれたというわけである。

15世紀も末になると、国王や貴族のもとに、成人の男性4名と少年1名からなる芸能集団が生まれている。これをもってイギリスにおける「劇団」組織の萌芽とみなすことができよう。彼らが芝居を上演するたびに、館の大広間や食堂には、即席で舞台がしつらえられたことだろう。村々に市が立ち、祭が催されるときに、声がかかれば、それに合わせて巡業に出かけることもあった。むろんそのような場合には、自分たちの身分を保証するお仕着せや許可状が与えられて、さもないと浮浪者と同断のあつかいを受けてしまった。邸宅で公演をおこなう場合には、一定額の報酬が決められていたはずだが、一步でも館の外で上演を企てるとなると、彼らの実入りは大道芸人となんら変るところなく、要するに観客のお恵み次第という結果になったことだろう。このような初期の劇団にまつわる保護と統制のシステムをめぐっては、近年、研究の進捗が著しいところである。

こうして芸人の集団は、イギリス中に模倣者を増殖させていった。祝日や行事が催される日には、馬上槍試合やアクロバットなどとならんで、芝居や見世物が演じられ、賑わいを見せるようになったのである。このころになっても宗教的な劇と大衆向けの演劇とは、必ずしも反目しあっていたわけではない。たとえば道徳的な色彩が濃い主題であっても、そこに笑いをもちこむことで、芝居の内容がいたずらに説教くさくなるという危険性から救ったのである。すなわち芝居のふたつのジャンルは互いに益する形で渾然一体となっていたように思われる。



今日のイギリスでも馬上槍試合は人気のあるショー・ビジネス。

しかし、ときに愚者祭の折など、悪ふざけが度を過ぎてしまった場合が出来し、役者たちが当局による取り締まりの対象とされることもあったという。実際、破門されたり、投獄の憂き目にあったりした者の記録が残されていて、さらに芝居の上演自体を禁止する布告が出された事例もあった。

1485年、ボズワースの戦いでリチャード三世が敗死し、ヘンリー七世の即位をもって



15～16世紀のロンドン・ブリッジの様子を描いた銘板。橋の上に住居が密集して建設されている様に注目。

チューダー朝が始まる。このころルネサンスの時代精神を学んだ学者たちの手によって、ギリシャ・ローマの古典文学がイギリスに多く紹介され、宮廷や大学やグラマー・スクールでラテン語の演劇を上演しようという機運が高まった。その影響がいちばん顕著にみられるのは、この時期に制作された笑劇の分野であった。

ヘンリー七世の息子ヘンリー八世が即位すると、彼は絶対王政を確立し、宗教改革を断行した。1548年にはコーパス・クリステイ祭が禁じられ、同時に祭に無くてはならないものだった芝居の上演も禁止されてしまう。こうしてヘンリー八世の娘、エリザベス女王が君臨する16世紀の末までには、聖史劇などの宗教的な劇は上演が禁止されるようになった。

アマチュア俳優による芝居の上演はこのような過程をへて、衰退の一途をたどっていったのである。とはいえその一方で、宗教的なテーマが扱いにくい状況であるにもかかわらず、民衆の間では逆に演劇熱が高まり、新しいタイプの芝居の書き手を必要とする状況が生まれていた。職業的な劇作家としての、いわゆる「大学出の才人たち」^{ユニヴァーシティウィッツ}の面々やシェイクスピアが活躍をはじめめるための風土ができあがってきたことになる。

大学出の才人たちの一人、クリストファー・マーロウはファウスト伝説を最初に文学作品へと結晶化させた劇作家として知られている。『フォースタス博士の悲劇』がそれで、2011年にロンドンのグローブ座で上演されたのをはじめ、現在でも劇団のレパートリーに入っている。

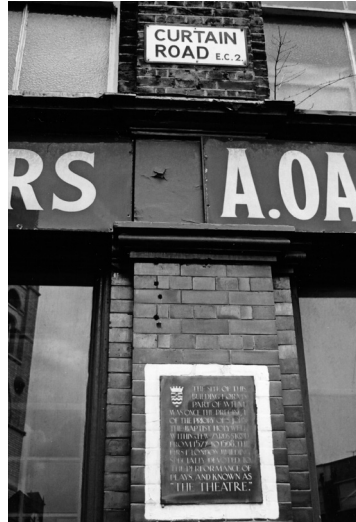
最初期の劇団のひとつ、レスター伯一座は1559年に結成されている。1574年以降は、これらプロフェッショナルな俳優たちによる芝居の上演が定期的におこなわれるようになっていった。イギリスにはじめて劇場として恒久的に使用される建物が作られたのもこのころである。座主に芝居の上演にたいする意欲や熱意があったことと、それに加えて劇場経営に関する諸々の資金が十分に運用可能であったことが大きい。事情によって劇場が使用できないときには、宿屋の中庭や



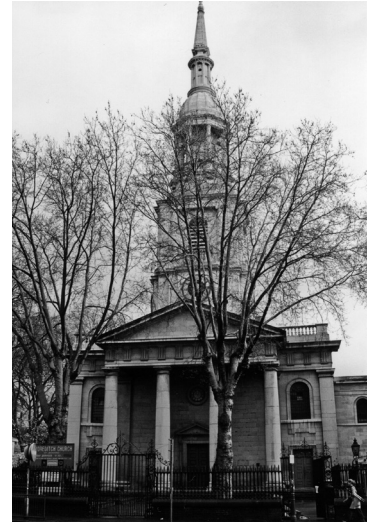
マーロウの生誕の地カンタベリーには、偉大な出身者を讃えてその名を冠した劇場が建てられている。



ショアディッチにあるザ・シアターの跡地であることを示す記念の銘板。



ザ・シアター付近に建設された2番目の劇場は地名を取ってカーテン・シアターと呼ばれた。カーテンとは劇場にふさわしい名前に聞こえるが、当時の劇場に幕はなかった。



ショアディッチのセント・レナード教会。バーベッジ親子ほか演劇関係者が葬られた墓がある。

大部屋が劇場の代替として利用された。ロンドン市内では、「ボアズヘッド館」や「ブル館」「バル館」など、エリザベス朝当時の著名な宿屋において、芝居が上演されたという記録が残っている。

イギリス演劇史上最初の劇場は、1576年、ロンドンのザ・シティの北郊に当たるショアディッチの地に建設され、ザ・シアターとよばれた。ショアディッチとは今日のリヴァプール・ストリート駅から北に数マイルほど向かったあたりの地区である。建設したのは、指物師の経歴をもち、興行師へと転身したジェイムズ・バーベッジ。その息子のリチャード・バーベッジは俳優になったが、まさにその彼が一員であったレスター伯一座によってこの劇場は使用されたのである。

同年、市内の特別管区にあった修道院跡地の一部がチャペル・ロイヤル少年劇団のための劇場として使用されることになり、こちらはブラックフライアーズ・シアターと称した。

前者のザ・シアターの系統に連なる劇場は、通例、公衆劇場とよばれ、低料金の一般大衆向けであった。立ち見客を入れた広い土間の中央部分に舞台が張り出した、円形3層の観客席をもつ屋外型の劇場である。後者のブラックフライ



ブラックフライアーズ修道院の跡地であることを示す記念の銘板。



その名も「プレイハウス・ヤード」という街路を発見。



1997年にテムズ川南岸に再建されたグローブ座の外観。



2011年にグローブ座で上演された『フォースタス博士の悲劇』の舞台。開演前の写真撮影が許可されている。舞台の1階と2階の部分。1階奥には役者の出入りのための通路が3か所設けられているのが分かる。2階には音楽家の一団が陣取るという演出だった。



机と椅子だけが置かれ、舞台装置がほとんどない裸舞台。エリザベス朝演劇の本質になった舞台。

アーツ系の劇場は、^{プライベートシアター}私設劇場といわれ、観客席は長方形、屋根のある室内型の劇場で、公衆劇場よりはるかに小さく、収容人数は少なく、料金も高かった。

このように劇場の種類に二つの異なるタイプが生まれたことについては、重要な側面がある。使用された劇場のタイプによって、上演される芝居にも質の違いが生まれることになった点である。それはまた、中世演劇の時代には一体であったはずの観客層が、この時期になって二分されていったことをも現していたのである。

16世紀末の時点で、5軒建設されていた公衆劇場を使用した劇団は、いずれも成人の俳優による劇団で、オックスフォード伯一座、リンカン伯一座、ストレインジ卿一座、ペンブルック伯一座、宮内長官一座、海軍大臣一座だった。私設劇場のほうは、王立聖歌隊出身の少年俳優たちの劇団が用いていた。当時流行していた芝居のタイプとしては、のちの歴史劇へと道を拓いた年代記劇、『ハムレット』のような名作を生みだす復讐悲劇、言葉遊びや諷刺に無類のおかしみを示した喜劇などがあった。16世紀末には、『ハムレット』第2幕第2場で言及されて有名な、成人劇団と少年劇団との間の競争に加えて、劇作家や座主同士の軋轢がたびたび起こって、またピューリタンとの確執もあって、

演劇界はきわめて不穏な状況下にあったと考えられている。

そのような折、1603年にエリザベス女王が他界し、ジェイムズ王が即位すると、演劇界にも大きな変革の波が押し寄せることになった。劇場ごとに劇団が割り振られる事態が生じたのである。私設劇場では、ホワイトフライアーズ座にキングズ・レヴェルズ少年劇団、ブラックフライアーズ座にクイーンズ・レヴェルズ少年劇団。公衆劇場では、^{キングズ・メン}国王一座（宮内長官一座改め）がグローブ座、ヘンリー王子一座（海軍大臣一座改め。のちにポールズグレイヴ一座）がフォーチュン座、クイーン・アン一座がカーテン座を占めて、いわば三大劇団といった格を示した。その後も、成人俳優たちの劇団と新しい劇場は作られるが、一方で少年劇団は成人劇団との競争



この公演では、観客が立ち見する平土間にさらにせり出すかたちで舞台がしつらえられた。



2階のギャラリー席から周囲を見回して。



同じく、再建途上のグローブ座、平土間からギャラリー部分を見上げて。



1988年から再建工事が始まったグローブ座。工事中の舞台部分には、まだ屋根がかかっていない状態。1996年春撮影。

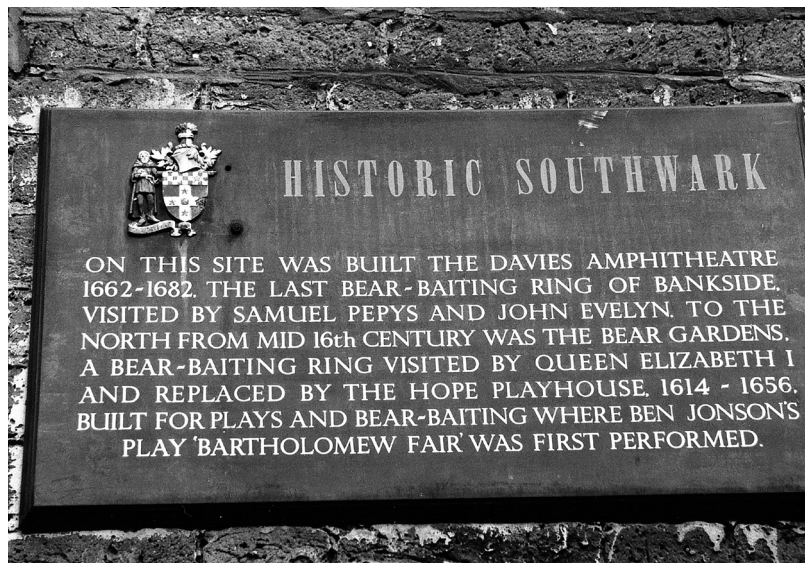
に敗れ、消滅していった。少年俳優たちの劇場は、彼らのレパートリーと一緒に、成人劇団の所有するところとなったのである。

シェイクスピアの活躍したのが、まさにこの時代に重なるのだが、そんな彼も当時はたくさんいた人気劇作家の一人にすぎなかった。すこし後輩に当たる俊秀劇作家ベン・ジョンソンは、恋愛喜劇を得意にしたシェイクスピアとは対照的に、風刺的な市民喜劇を書いて次々にヒットを飛ばしていた。

また宮廷では王侯貴族の娯楽として仮面劇が人気を博すなど、新しいカテゴリーの演劇が続々と生まれていた。エリザベス、ジェイムズ、チャールズと三代にわたってつづいた演劇の黄金時代はしだいに陰りを見せはじめ、結局、1642年のピューリタン革命の勃発とともに劇場は封鎖されることになった。ヘンリー八世による宗教改革以来、演劇界に政治的な圧力を加えようという種々の方策が取られてきたわけだが、劇場の閉鎖はその必然的な帰結であったという説が説得力をもつところではある。

共和国の時代を通じて演劇の公演が完全に根絶やしにされたわけではなかったが、結局、すべての劇場建物は破壊され、残念ながら、当時のままの姿で今日まで残存する劇場はイギリスにはひとつも存在しないのである。

(本稿掲載の写真はすべて筆者撮影)



テムズ川南岸サザック地区に、熊いじめ場があったことを示す記念銘板。ここで、ベン・ジョンソンの『バーソロミュー・フェア』が上演されたと記されている。

主要参考文献

先達の研究から多くの恩恵・教示を賜っているが、本稿の性格に照らして、主として学生に役立つような文献を挙げるにとどめたい。

Hartnoll, P. (ed.), *The Oxford Companion to the Theatre*, 4th ed. (Oxford University Press, 1983)

Banham, M. (ed.), *The Cambridge Guide to Theatre* rev. ed. (Cambridge University Press, 1992)

Wickham, G., *A History of the Theatre*, 2nd ed. (Phaidon Press, 1992)

Trussler, S., *The Cambridge Illustrated History of British Theatre* (Cambridge University Press, 1994)

Parsons, K. & Mason, P. (eds.) *Shakespeare in Performance* (Salamander Books, 1995)

大場建治『ロンドンの劇場』（研究社、1975）

フランセス・イエイツ著、藤田実訳『世界劇場』（晶文社、1978）

玉泉八州男『女王陛下の興行師たち——エリザベス朝演劇の光と影』（芸立出版、1984）

石井美樹子『中世劇の世界——よみがえるイギリス民衆文化』（中公新書、1984）

青山誠子『シェイクスピアとロンドン』（新潮選書、1986）

サイモン・ティドワース著、白川宣力・石川敏男訳『劇場——建築・文化史』（早稲田大学出版部、1986）

定松正他編『イギリス文学地名事典』（研究社、1992）

ウォルター・ホッジズ著、井村君江訳『シェイクスピアの劇場』（ちくま文庫、1993）

アンドルー・ガー著、青池仁史訳『演劇の都、ロンドン——シェイクスピア時代を生きる』（北星堂書店、1995）

松田隆美編『イギリス中世・チューダー朝演劇事典』（慶應義塾大学出版、1998）

ロビン・メイ著、佐久間康夫編訳『世界演劇事典』（開文社、1999）

高橋康也他編『シェイクスピア辞典』（研究社、2000）

ウォルター・ホッジズ著、河合祥一郎訳『絵で見るシェイクスピアの舞台』（研究社、2000）